

八重と会津

新島学園短期大学キャリアデザイン学科准教授

やました
ともこ
山下 智子

山本八重子から新島八重へ

八重はこれまで、生まれ故郷・福島県会津若松市において、新島襄の妻・新島八重というより、むしろ会津藩砲術師範山本家の娘・山本八重子として知られてきたように思います。つまり襄との結婚以降よりも、戊辰戦争時に女性でありながら断髪・男装で籠城し、銃を持ち勇ましく戦った事で長らく親しまれてきたのです。

2013年大河ドラマ『八重の桜』の主人公が「新島八重」と発表されて以来、八重は会津でもあつという間に新島八重の名で呼ばれるようになりました。そして、戊辰戦争後に京都で襄と結婚してク

リスチャンとなった事や、襄の死後は篤志看護婦や茶道師範として活躍した事もだんだんと知られるようになってきました。

しかし、襄と結婚した八重が会津に対してある重要な役割を担った事や、会津の人々にある重要なメッセージを残している事は、残念ながらまだほとんど知られていません。呼び名が新島八重になっても、「八重と会津」といえば、相変わらずその興味の大部分は戊辰戦争での活躍と、その時に見せた「ならぬことはならぬものです」（日新館童子訓「什の掟」最後の部分）によく表される「武士の心」をその後どのように持ち続けたかに注がれているようです。

「其レヨリ該地伝道ノ事ヲ
主唱シタリ」

八重の重要な役割とは何でしょうか。

それは八重が襄に会津伝道の志を与え、その結果、会津に日本組合基督教會（同志社系の教會）に属する会津若松教會（建てられ、東北伝道の拠点として期待されていたということ）です。キリスト教の伝道は襄が行ったことで、八重は関係ないと思われる方がおられるかもしれませんが。しかし会津・東北伝道に関しては八重の存在は無視することができません。

1882年夏、八重と襄は夫婦揃って会津若松を訪れました。これは襄にとつては初めての会津訪問でした。襄は中山

道を徒歩で襄の父祖の地・群馬県安中市に向かい、船に乗り横浜から陸路で安中に来ていた八重と合流します。八重にとつても初めての安中訪問でした。その後、二人は日光見物をしつつ白河を通り、会津へと向かいました。

会津において襄は「官軍之為メニ階イレラレタル孤城ヲ一周シ、又生キ残リタル人々ニモ面会シ、当時ノ有様ヲ聞キ、会津藩人ノ如此モ宗家徳川氏ノ為ニ官軍ニ抵抗シ、白骨ヲ原野ニサラスモ願ミサルノ勇氣ニハ大ニ感服致シ」ています。八重は襄にとつて最高の案内役でした。その結果、襄は「其時ヨリ会津人ニ向ヒ非常ノシンパシーを顯ハシ、其レヨリ該地伝道ノ事ヲ主唱」（『新島襄全集』4巻）するようになったのです。

「スバルタン人種ニ近き人間」

さらに付け加えるならば、この1882年の会津訪問は山本家の私的な用件によるものと考えられています。この時の旅のメンバーは八重と襄の他は、八重の姪・峰（兄・山本覚馬の娘）とその夫の

横井時雄です。つまり山本家の女性たちが京都から遠く離れた会津に帰るのにその夫たちが付き添った旅でした。確かに八重の兄・山本覚馬は襄が同志社を創立する際の重要なパートナーですが、それだけならば襄はこの時會津に来る事はありませんでした。八重の夫であったからこそ会津を訪れ、会津の人々に深く共感し、会津をはじめとする東北伝道の情熱をもつ事に至ったといえます。

襄はその後、1885年秋、教え子の小崎弘道が会津を含む東北の伝道に向う際に、渡米し療養中だったにもかかわらず様々なアドバイスを書き送ります。「スバルタン人種ニ近き人間」である福島県下二地を撰ぶべきや」（『新島襄全集』3巻）とはそうした手紙の一節です。襄が福島の人々を「スバルタン人種ニ近き人間」と思っていた事が分かります。襄は八重や周辺の人々を見てその様に評価し、伝道の拠点として福島県に期待したのです。また最初の会津訪問以降「該地伝道ノ事ヲ主唱シタリ」と記されているのは、1890年1月17日、新潟県長岡市の伝道中だった時岡恵吉に宛てた手紙です。

襄はこの6日後の1月23日に亡くなりましたが、これは襄の自ら筆をもつて記した最後の手紙です。つまり襄は、1882年に八重と共に初めて訪れた会津で与えられた「会津を拠点とした東北伝道の情熱」を、最後の日まで強く持ち続けていたのです。八重の存在が襄の公的な働きにどの様に大きなインスピレーションを与え影響したかを示す一例でしょう。

会津若松教會の設立

襄が2回目に会津若松を訪れるのは1886年5月22、23日、会津最初の信徒となる14名に洗礼を授けるためでした。翌24日、喜多方にも伝道しています。襄に先立ち1886年1月21、23日、襄の父祖の地・群馬より安中教會2代目牧師の杉田潮、高崎教會（西群馬教會）初代牧師の星野光多が伝道応援に駆け付け、会津最初のキリスト教集會を開いています。5月31日にやはり群馬より原市教會の伝道師だった山岡邦三郎が会津初の定住牧師になります。また喜多方、本郷（現会津美里町）、大沼（現会津美里町）、坂

下に次々と講義所がつくられました。会津には新島襄の教え子らが複数送り込まれ、襄の死後1891年には会津若松教会が外部からの支援を受けずに自立することを宣言する自給独立式が行われました。正式にはこの日が創立記念日とされています。1895年には会津出身であり同志社で学んだ兼子重光が会津若松教会牧師となり以降35年間にわたり働きました。

兼子重光は同志社在任中の1902年、「東北組合基督教員一覧表」によると東北の組合教会・講義所合わせて10か所、会員378名でした。その内教会・伝道所の5か所、会員139名が会津に集中しています。「会津若松教会 百年の歩み」こうしたことから八重が新島襄の妻となつた事が、どれほど会津伝道において大きな意味をもつたかということが分かります。

兼子重光

兼子重光は同志社在学時代、松平容保の嫡男・松平容大のお目付け役を務めた

られた教会とその関係者を大切に思い交流を続けていたのではなかったでしょうか。

八重はこの時會津、山形の後に安中も訪れています。安中は襄の没後30周年を記念し堂々たる石造りの新島襄記念会堂が建てられたばかりで、八重はそこに立ち寄り教会の人々の歓迎を受け襄の思い出などを話しています。群馬の諸教会の応援で会津の教会が建てられた事もあり、八重は自分の故郷とそこに立つ教会同様に、襄の父祖の地とそこに立つ教会やその関係者も大切に思っていたことでしょう。

ことで知られます。容保は八重が敬愛してやまない戊辰戦争時の会津藩主です。当時の同志社は道徳的に厳しく、容保は素行不良だったため長くは京都におりませんでしたが、新島夫妻と兼子や容大ら会津出身の学生が仲良く並んで撮った写真が残っています（P.11）「会津出身学生の集合写真」参照）。八重が会津出身の彼らに気かけ、特に兼子に聞しては会津若松教会の牧師となつてからも親しい交わりを続けていたと考えるのが自然でしょう。

会津若松教会は、1891年に自給独立を果たしたものの内実が伴わないままでした。そのため1907年に再度自給独立式を行っています。その際に八重が寄せたお祝いの和歌が、兼子と兼子の妻・健子の歌と共に額に収められ残っています。



日は好日(個人蔵)

「心の和きもの
その人は地を嗣がむ」

太平洋戦争後すぐの1946年、会津若松では会津図書館移転を記念して公会堂で3日間にわたり「会津人三人 山川浩 廣澤安任 新島八重子 遺墨展覧会」が開催されました。その際の目録によると、「心和得天真」と共に「心の和きものその人は地を嗣がむ」という八重の書が同一人物により出展されています。「心の和きもの」は残念ながら現在所在不明になっていますが、この二つの書は内容的に重なり合うものです。「心和得

す。(P.8)「左から兼子重光、兼子健子、新島八重(代筆)の短冊」参照)ただし八重の歌は代筆で、この八重の歌がもととは教会もしくは、兼子にあてた手紙の中に記されたのではと推測されます。

1921年、満75歳となった八重は会津や安中を再び訪れています。数えて自分の年を表し77歳と署名され、おそらく八重がこの会津訪問時に記したと思われる書が会津には複数伝わっています。「心和得天真 新島八重子 七十七歳」、「日は好日 新島八重 七十七歳」、八重と戊辰戦争をともに戦った中野竹子姉妹の絵に添えられた「勇婦竹子女史 七十七 新島八重子」などがそうです。そのうちの「日日」と「勇婦」はいずれも兼子の関係者により現在に伝わっています。つまり八重は晩年になつても故郷に建て

天真」に関しては、実は襄も生前同じ言葉を書に残しています。この言葉は李白の詩の一節ですが、クリスチャンとしては「心を和やかにすれば神様の御心を知ることができると理解すべきでしょう。75歳の八重は襄から受け継いだこの言葉を戊辰戦争の時の悲しみや悔しさをいまだに抱え続けているだろう故郷の人に送りました。

「心の和きもの」はマタイによる福音書5章5節にある主イエスの言葉で「新共同訳 聖書」では「柔和な人々は幸いです、その人たちは地を受け継ぐ」となっています。戊辰戦争の際には自らも



新島八重「心和得天真」(福島県立博物館蔵)

新島襄「心を得天真」(同志社史資料センター蔵)

銃を持ち戦い辛酸をなめた八重が、その後、襄と結婚しクリスチャンとなり故郷の人々にこれらの言葉を残したことは意味深いことです。これらは彼女のクリスチャンとしての信仰の証であり、故郷の人々への深い祈りが込められているように感じられます。

「武士の心」と「信者の心」

1876年に八重は襄と結婚し、14年間を夫婦として共に歩きました。そのため八重は信仰的に襄から大きな影響を受けました。とはいえ結婚直後から八重が

とぶつかる事もあったでしょう。この時襄は夫婦の間でも忍耐すべきところは忍耐し、常に思いやりを持ち、ゆるしあつて仲良く過ごそうと約束したかったのでしょうか。

八重はこの襄のクリスチャンとして、夫としての言動に深く感動します。そして八重はその日以来、襄に対してはもちろん、すべての人に対して何時も忍耐しゆるすことを隣人愛の基本として大切に守り、心安らかに毎日を過ごすよう心掛けるようになりました。

愛とゆるしに生きる幸い

八重はお正月には自宅に学生を招き、会津独特のかるた会を行うのが恒例でしたが、薩長の学生は決して招きませんでした。ところが襄が亡くなる直前、初めて鹿児島を招きました。薩長といえば戊辰戦争時に会津が敗れた敵です。八重にとつての敵とは何よりも戊辰戦争時の敵であり、「ならぬことはならぬ」「武士の心」では、敵は敵のままでありどうしてもゆるす事が出来ずにいたの

大きな「信者の心」をもっていたわけではありません。例えば1885年に渡米療養中の襄が八重に出した手紙には「何卒、武士の心ばかりにては足らず、真の信者の心を以て主と共に日々御歩み被下度奉希候」(『新島襄全集』3巻)とあります。結婚後9年がたつても襄から見れば八重はまだまだ「武士の心」が大きいと感じられる事があつたのでしょうか。特にこの前の部分は「己を愛する者の為に祈るのみならず己れの敵の為にも熱心に祈り」とあり、八重が敵と考える人々への態度が問題とされている事がわかります。

です。しかし、襄との約束の握手や、襄との別れが近づいている事がきっかけになり、ついに八重は「武士の心」よりも大きな「信者の心」をもち、敵さえも愛する努力をするようになっていったのです。この時京都から遠く離れて闘病中だった襄はこのことをとても喜びました。(『追悼集』6巻)

前述の「遺墨展覧会」の「はしがき」には戊辰戦争後の会津の苦難が、太平洋戦争後の日本の苦難に重ねられ「今や、民主主義に生きて再建すべき日本に、旧會津藩子弟の再起は、何等かのヒントを与えるのではあるまいか」と述べられています。会津の人々がつらい敗戦を再度経験した時に八重に注目したことは興味深いことです。

東日本大震災後の痛みの中で、太平洋戦争後にも注目された八重の生涯が今再び注目を集めています。激動の時代をたくましく生き抜いた八重。襄によって神と出会った事がその生涯をより彼女らしく力強いものになっています。「新島八重と会津」という時に、わたしたちは是非、八重が会津・東北伝道において果たした

役割や、故郷の人々に「武士の心」だけではなく「信者の心」で愛とゆるしに生きる事の幸いを伝えようとしていたことを覚えていたいと思います。

〈参考文献〉

- 『会津若松教会 百年の歩み』会津若松教会、2001年。
- 『上毛教界月報』7巻、不二出版、1984年。
- 『新島襄全集』3、4、5、8巻、同朋舎、1987―1992年。
- 『追悼集』6巻、同志社社史資料室、1993年。
- 『会津人三人 山川浩 廣澤安任 新島八重子 遺墨展覧会』目録、会津図書館、1946年。